

本所・深川が出てくる噺 あれこれ

3月に古川（渋谷川）の歴史を遡る勉強をしたことがきっかけとなり、東京の現在の地図と古地図とを並べて眺めて見るが多くなった。見ていると、なるほどと思うことや、不思議に思うことが多い。江戸時代に行われた「本所・深川の水路整備」とその浚渫土でできた「埋立地」も興味深いし、落語に出てくる古い地名の発見も面白い。

地図を見ていると様々な発見や再発見があり、そこから様々なテーマへの広がりもあり、興味は尽きない。そして、その場所へ行って自分の目で確認してくるのも面白い。

いくつかの落語に出てくる本所・深川周辺の地名を拾い出して、地図を見ながら確認してみることにした。

<1> 辰巳の辻占

このきっかけになった洲崎遊廓が登場する落語は「辰巳の辻占」だが、この遊廓が出来たのは明治21年なので「江戸の水路」とは結びつかない。しかし洲崎は、元禄時代を中心に本所・深川に水路が整備された時に、その浚渫土を使用して造成した埋立地なので、あながち無関係とも言えない。

洲崎橋より先（現在の東陽一丁目）は海だった。そこを埋め立ててできた「洲崎十萬坪」は、富士を拝むことも出来る景勝地だったらしい。

明治の中後期のこと、洲崎の遊女に入れあげた男は、女の本意を確かめるために「心中を持ちかける」という奇策に出る。とは言っても自らの発案ではなく、伯父さんに勧められた筋書きを実行に移すという「どうしようもない男」がやることなので……。

洲崎橋を渡って海に突き出た島に入って、大門を潜りいつもの店で女と会う。そして首尾通りにことが運び、島の先端の海に向かう。現在は南開橋を渡ると次の島に渡ることが出来るが、当時は次の島もなく橋もなく、海の音が聞こえるだけのところだった。

暗闇の中でお互いの位置確認ができないのを良いことに、身代わりの石を海に投げ込んで「ドボン!」。男は入水のふりをして何もせず、大門通りを帰ってしまう。

女は闇の中で水音を聞いて、跡を追って「ドボン」。

*参考情報 <http://www1.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/toyocho.pdf>

<2> たがや

両国の花火大会の日に両国橋の上で事件が起きる。

家来を連れて馬に乗った侍は本所方面から来て江戸市中に向かう。

一方、仕事が終わって家路につく職人は両国橋西側の両国広小路から橋に入る。橋の上は花火見物の客でごった返している。道具箱と丸めた「たが」を抱えた職人が、人々に頭を下げつつ人垣をかき分けて前へ進む姿が想像できれば、この噺は盛り上がる。

しかしながら、職人が肩に道具箱を乗せて歩く姿を想像できないし、「たが」を運ぶときにどのような形状にして運ぶのかが分っていないと臨場感は半減する。21世紀の今となっては、実際にこの二点を身を以て理解している落語家だってそうはいない。侍と職人のやりとりの面白さだけにアクセントを置いた高座が目立つこの頃、時代の流れてやむを得ないのかもしれないが、噺家にも努力が必要な状態になっている。

この噺の舞台となっている両国橋は、現在も同じ位置に残っている。1657年（明暦3年）の明暦の大火で逃げ場を失った約10万人の被害者が出てしまったことから、老中酒井忠勝の提言により架橋

が決まった。1660年前後に完成し、隅田川への架橋としては千住大橋に続いて二番目だった。

「江戸名所図会」によると、昔は川の流れは大川と呼ばれ、両国橋は大橋と呼ばれた。扇を開いた状態をかたどったもので、さらに昔は国境だったこともあり「両国橋」とも呼ばれたと記述があった。(右画像：両国橋) 橋は木製なので、火災による延焼被害から守るために橋のたもとに火除け地が設けられた。江戸時代の古地図を見ると、両国橋西詰めには「両国広小路」という広い広場のようなのがあり、東詰にも小さな広場がある。現在の地図でもかすかにその片鱗を感じる事が出来る。

やがて広小路には、折々に露天商や見世物小屋などが並ぶようになり繁華街になったようなので、花火大会の時のごった返しや賑わいが想像できる。



<3> ねずみ穴

ねずみが人間と共生していた時代には、建造物の土壁の至る所にねずみがかじった穴が空いていて、夜の運動会の出入口になっていた。密閉されていて様々な視点から安全度が高いとされていた土蔵も、ねずみ穴が空いてしまえば、備蓄品がねずみの餌食になるばかりか火事の時には火も空気も入り、安全な場所ではなくなる。商売人や資産家は、蔵にねずみ穴を見つけたら速やかにふさぐという気配りをしていた。

こんな生活環境が理解できないと、この噺には入っていけないので、徐々に「絶滅危惧落語」になりつつあるのは残念なことだ。

親の財産を受け継いだ兄弟の話。弟は酒と道楽で大半を失い兄の所に転がり込む。兄が出してくれた三文を元手にこつこつと働き、やがて深川蛤町に小さな店を構えるところまで来た。借りた三文に礼を付けて返すことが出来たのだが、これでハッピーエンドと言う訳にはいかず、これでもか、これでもかと災厄が襲いかかってくる。

さてこの噺の舞台となっている「深川蛤町」とはどこにあるのだろうか。江戸時代の古地図を開いて、拡大鏡の力も借りて見つけた。

門前仲町の交差点から越中島に渡る黒船橋のたもとが蛤町で、周囲は永代寺の門前町になっていた。黒船橋の下を流れる水路は大横川。余談だが、黒船神社という名前が気になったので調べてみた。

創建時期は西暦1000年前後で、浅草にあったが火災で焼失し、この地に再建されたという記録が残っている。「黒船」という名称について

は諸説あって確定情報はないらしい。また、戯曲作家鶴屋南北が晩年をこの境内で過ごしたとのことを示す説明看板が建っている。

対岸の越中島は、元は隅田川河口の中洲だったが、播州の領主榊原越中守の別邸があったことからこの名が付いた。その後この島には幕府が設けた武道訓練所・調練場などができ、近代に入って商船大学(今の名は東京海洋大学)ができた。



<4> もう半分

永代橋の近くで、夫婦で一杯飲み屋を開いている。縄のれんがぶら下がっている、さほど繁盛しているとも思えない小さな店に、年老いた行商が毎晩やってくる。

五郎八茶碗に一杯の酒が16文だが、「お酒を半分だけ入れてくれ」と言う。

一杯飲み干すとまた、「もう半分」と言ってまた半分だけ酒をもらう。

いつも同じ飲み方をするので、不思議に思った店主が訳を尋ねると、

「沢山飲んだような気がする、その割には安上がりで済む」という答が返ってきた。

ある日、ちょっとした事件が起きるのだが、これがちょっとした事件ではなく大事件に発展する。お店があったのは永代橋の西詰めの路地裏ではないかとされるが、橋を渡って深川の路地裏とする説もあるらしい。しかも、舞台を永代橋ではなく千住大橋としたバージョンもあるらしい。三遊亭圓朝作の怪談噺で、原題は「五勺酒」。圓朝の弟子だった初代三遊亭圓左が原話に近い噺をしていたらしいが、その中では舞台は永代橋となっていたそうである。

現在の永代橋は、日本橋川と隅田川の合流地点の南側にあるが、江戸時代には合流点の北側にあった。昭和30年代の終盤から40年代に深川佐賀町で仕事をしたことがある。日本橋・茅場町から都電に乗ることが多かったが、やがて都電がなくなりバスになった。茅場町を過ぎて新大橋通りを渡り新川一丁目まで来ると景色が一変した。オフィス街はなくなり、4F建て以上のビルはポツンポツンと建つ程度で、その中に酒屋・酢屋の名前が目立った。昔から亀島や霊岸島には酒問屋が多かったらしい。永代橋を渡るとさらに一変して、ひとことで言えば「特別なものは何もない町」だった。かつての水運の名残だろうか、裏通りの運河沿いには倉庫が並んでいた。その静けさは門前仲町の手前まで続いていて、門前仲町の四つ角からは他所の国のような賑わいに変った。裏通りに入ると、人も来そうもないような所に小さな飲み屋があったような記憶がある+

<5> 船徳

道楽が過ぎて勘当されて、柳橋の船宿に居候する若旦那の名前は徳兵衛。

「俺も船頭をやりたい」と言い出したが、体の鍛えはできていないし、技術も知識も何もない。

「色っぽい仕事だから・・・」というだけの浅はかな思いつき。

浅草の四万六千日の日、船宿は大繁盛で、船頭が出払ってしまったところへ客が来て、

「大棧橋までやってくれ」と言う。

かくして徳兵衛改め船頭の徳さんの初仕事となるのだが……。両国橋のわずか北側で、神田川が隅田川に合流する。

(左画像：神田川・隅田川合流地点 古地図)

合流点の手前に架かる橋が神田川の柳橋。江戸名所図会の一文によれば、隅田川(大川)の西岸にある柳原堤の末端にかかる橋であることから「柳橋」と名が付いたとのこと。

神田川の両岸には船宿が並んでいたが、現在もいくつか船宿が残っている。

柳橋を渡って神田川の北側にあった歓楽街が柳橋。(現在の地図 <https://yahoo.jp/zh4UgK>)

「柳橋から小舟を出して・・・」と歌にも歌われているように、船宿や小料理屋でイッパイやってから船を出して浅草へ、吉原へと足を伸ばす。

お客が目的地として示した「大棧橋」というのは駒形橋のたもとにあり、ここで下船して駒形堂で身を清めてから真っ直ぐ北に歩くと雷門になる。

ところがもう一説あり、「大棧橋」は言問橋のわずか上流の待乳山聖天の脇の山谷堀に入って最初の橋である今戸橋のたもとにあった。ここで下船して土手八丁を吉原へ向かうコースになっていたという。現在は山谷堀も土手八丁もなく、その名残として、三ノ輪橋へ抜ける「どて通り」が走っている。最終目的地が浅草寺か吉原か、という大きな違いがあるのだが、両国橋から駒形橋までは約2Km、言問橋までは約3Kmある。隅田川の流れに逆らって船を操るといって、にわか船頭の初仕事としてはかなり難易度の高い仕事である。そして、その結末や如何に・・・。

この落語が高座にかかる季節が近づいてきたが、観光船の沈没事故の捜索や捜査の状況を毎日報じている今年は、この噺をやるのには不適當な気がする。

以上